

匹見町埋蔵文化財調査報告書第34集

—益美地区県営中山間地域総合整備事業に伴う発掘調査報告書—

# 山根ノ下遺跡



2001年3月

島根県匹見町教育委員会

— 益美地区県営中山間地域総合整備事業に伴う発掘調査報告書 —

# 山根ノ下遺跡

2001年3月

島根県匹見町教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、島根県益田農林振興センターの委託を受けて、匹見町教育委員会が平成12年度に行った益美地区県営中山間地域総合整備事業に伴う、山根ノ下遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査は、次のような体制で実施した。

調査主体	匹見町教育委員会		
調査員	匹見町教育委員会文化財保護専門員	渡辺 友千代	
	匹見町教育委員会主任干事	山本 浩之	
調査補助員	匹見町埋蔵文化財調査室	栗川 美文	
遺物整理員		大賀 幸恵	大谷 真弓
調査指導	島根県教育委員会文化財課		
	広島県立美術館学芸課長	村上 勇	
事務局	匹見町教育委員会教育長	寺戸 等	(平成12年9月30日まで)
		松本 降敏	(平成12年10月3日まで)
	匹見町教育委員会次長	大谷 良樹	
発掘作業員	栗田 勉 栗田 修 村上 強 村上 稔		
	森脇 雅夫 中間昭二郎 岡本 三生		

3. 調査に際しては、島根県益田農林振興センターの池田技師をはじめ、島根県教育委員会文化財課に終始多大な協力をいただいた。また、広島県立美術館の村上勇学芸課長から一方ならぬご教示を得るとともに、飛鳥資料館の杉山洋研究官には出土した和鏡について見解をいただくとともに、細川美樹氏からもご協力得ることができた。

なお、発掘現場においては土地所有者をはじめ、地元の方々に終始多大なご協力を得て、ここに無事発掘調査を終えることができたことに対してお礼を申し上げたい。

4. 今回の調査において、柱穴遺構—P、土坑状遺構—SKと略号している。なお、現場あるいは編集に掲示した現地図面は、美濃郡匹見町土地改良区の協力を得た1/1000の縮尺ものであり、また位置図などは縮尺1/25000を使用したものである。

5. 編集にあたっては、前掲の調査員・調査補助員及び遺物整理員らの協力を得て、執筆・編集は渡辺・栗川がともに行ったものである。

# 目 次

第1章 発掘調査に至る経緯と経過	.....(渡辺友千代)	1
第1節 発掘調査に至る経緯	.....	1
第2節 発掘調査の経過	.....	1
第2章 調査地区的環境	.....(渡辺友千代)	2
第1節 地形的立地	.....	2
第2節 歴史的立地	.....	2
第3章 調査概要	.....(栗田 美文)	4
第1節 はじめに	.....	4
第2節 調査区の設定	.....	4
第3節 層序と層位	.....	6
第4節 遺構	.....	9
1. はじめに	.....	9
2. 検出遺構	.....	13
第4章 出土遺物	.....(渡辺友千代)	18
第1節 はじめに	.....	18
第2節 出土・採集遺物のようす	.....	18
第3節 尖頭遺物	.....	20
1. 繩文遺物	.....	20
2. 中世遺物	.....	21
第5章 小括	.....(渡辺友千代)	27

## 挿図・図表目次

第1図 調査地点位置図	1
第2図 山根ノ下遺跡と周辺の遺跡位置図	2
第3図 地形断面図	4
第4図 調査区配置図	5
第5図 配置地区名図	6
第6図 土層堆積状況図(1)	7
第7図 土層堆積状況図(2)	8
第8図 遺構指示図	10
第9図 遺構陥入状況図(1)	13
第10図 遺構陥入状況図(2)	13
第11図 遺構陥入状況図(3)	14
第12図 遺構陥入状況図(4)	14
第13図 遺構陥入状況図(5)	15
第14図 遺構図	16
第15図 繩文遺物実測図	19
第16図 土師質実測図	20
第17図 瓦質実測図	21
第18図 瓦質・須恵質・上鍾実測図	22
第19図 陶磁器類実測図	23
第20図 和鏡・鉄劍・口金実測図	25
第21図 石臼実測図	26
第1表 遺構計測表	11~12
第2表 遺物集計表	18

# 図版目次

図版1 鳥瞰する遺跡と周辺部

図版2

1. 北側からみた遺跡の全景
3. 北側からみた十字トレンチの発掘風景
5. A調査区の状況と北壁（南西から）
7. C調査区の東壁（北西から）
2. 北見川から捉えた遺跡の全景（南東から）
4. A調査区の西壁（南東から）
6. B調査区の北東壁（南から）
8. D調査区の南西・西壁（南東から）

図版3

1. 上師器の出土状況
3. 陶磁器の出土状況
5. A調査区の遺構表出状況（北から）
7. SK12の表出状況（北から）
2. 足鍋の出土状況
4. 打製石斧の出土状況
6. 焼土の顯著なSK02の表出状況（北から）
8. SK13の表出状況（南から）

図版4

1. SK20の表出状況（北から）
3. C調査区の遺構表出状況（北西から）
5. SK48の表出状況（北東から）
7. D調査区の遺構表出状況（北から）
2. B調査区の遺構表出状況（南から）
4. SK44・SK45の表出状況（北から）
6. SK50の表出状況（西から）
8. SK58の表出状況（北から）

図版5

1. SK10の半截状況（北西から）
3. SK16の半截状況（北から）
5. SK28・SK29の半截状況（北から）
7. SK48の半截状況（南東から）
2. SK13の半截状況（北から）
4. SK20に検出された焼石（北から）
6. P68・P69の検出状況（北から）
8. SK50の半截状況（北西から）

図版6

1. P96の検出状況（西から）
3. SK62の半截状況（西から）
5. 北からみたA・B・C・D調査区の遺構完掘状況
2. SK58の半截状況（南東から）
4. A調査区の遺構完掘状況（南から）

図版7

1. 鉄剣の出土状況
3. 繩文上器・土師質類
5. 土錐・陶磁器類
2. 和鏡の出土状況
4. 土師・瓦質・須恵器類

図版8

1. 石器類
3. 鉄剣のX線写真
2. 金属器類

# 第1章 発掘調査に至る経緯と経過

## 第1節 発掘調査に至る経緯

本遺跡（山根ノ下遺跡）の発掘調査は、平成12年度から始動した益美地区中山間地域総合整備事業に伴って発生したものである。

よって、平成12年度には対象地であった澄川地区の持三郎を中心に、5地点を選定して分布調査を実施したのであった〔註1〕。その結果、該地点では数点の陶磁器・鉄滓、そして1点の打製石斧が出土したことから遺跡であることが判明したのである。したがって匹見町教育委員会は、事業主体者側である益田農林振興センター宛に平成12年3月13日付で、その状況および文化財保護の必要を通知したのであった。

本事業にかかる協議は、主体者である益田農林振興センター、および委託者側である匹見町教育委員会の関係者が出席して平成12年5月11日に行った。その結果、整備工法上已をえない部分のみを調査することを了承し、同年5月18日には両者と委託契約を結んだのである。そして発掘調査の届出は平成12年5月29日付で送附し、事前の諸手続を終えたのであった。

## 第2節 発掘調査の経過

現地調査は平成12年5月22日から実施したが、調査を進めていくにつれ、頭初、想像していた縄文遺跡とは異なり、その主体は中世期のものであることが次第にわかつてきるのであった。

該期の遺構に位置付けられるものも多く検出され、青磁・白磁などの外来陶磁器、鉄剣などの出土からは本住居者が唯者ではなく、本地域における支配階級者ではなかったかと想像させたのである。そして和鏡の出土は、暑い季節の最中、調査員は勿論のこと作業員に更なるファイトを噴出させた思い出深い遺物でもあった。

なお、現地調査は同年8月末には無事に終え、平成13年2月5日には特に陶磁器類を中心に、広島県立美術館の村上勇学芸課長に分類及び指導を得たのであった。  
(渡辺友千代)



第1図 位置図

〔註1〕『匹見町内遺跡詳細分布調査報告書』(第30集) 匹見町教育委員会2000年3月

## 第2章 調査地区の環境

### 第1節 地形的立地

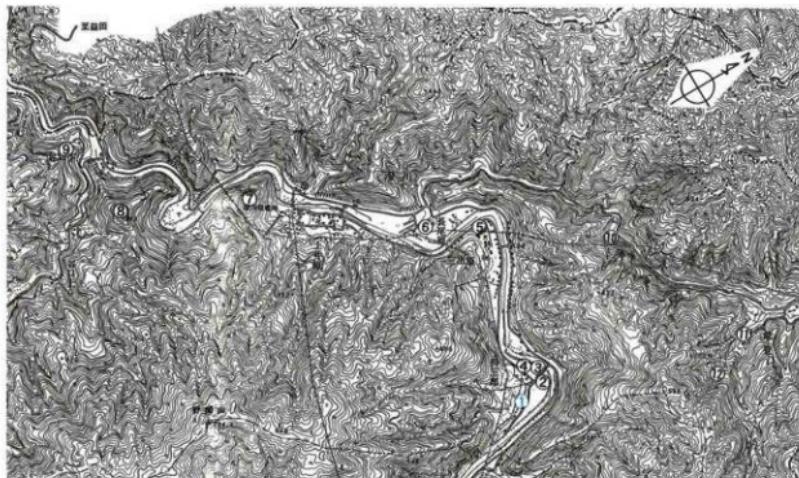
該当地は、町域の北部に位置する島根県美濃郡匹見町大字澄川のうちの、持三郎（もっさぶろう）という小字単位を中心とした小地区である。

そこは南西側の山地が舌状を成して派生しており、匹見川はその端部を比高差約4・5mを測って、大きく蛇行して北西流している。また平坦を成す可耕地は、標高170～176mを測り、大半は水田として拓かれており、また山裾側を中心に10軒ばかりの民家が点在する。そして、その上段部は標高約192m台を測って一部平坦地がみられ、そこは畠地と化され、つまり2段からなる河岸段丘に形成されているという景観に立地する（第1・2図・図版1）。

### 第2節 歴史的立地

本地区における周知の遺跡は、慶長年間（1596～1615）から大正5年まで在存したと伝えられる「長蓮寺跡」（第2図）のみで、原始・古代遺跡は勿論のこと、他にも顯著な歴史的痕跡のものはない。

今のところ史料的初見は、永和2年（1376）に成るという「益田本郷御年貢并田數目録帳」および



第2図 山根ノ下遺跡と周辺の遺跡位置図

「益川本郷田数注文」〔註1〕に、本地区を指すと想定できる「墨河・物三郎分」が確認される。

ただ本史料では物三郎が用いられており、現在の持三郎とは異なっているものの、墨河（澄川）と連名されていることからみて、それは本地区を指しているものとして判断してよいだろう。このことから南北朝において、既に益田氏によって奥十二畠地域として、最上流域に当たる本地区が支配されていたらしいことが判るのであるが、明確な本百姓層の名主制によって成立していたものは確かではない。物三郎という耕地名に「分」が附けられていることから、それは山間地という僻地、しかも狭小地という立地性からみて、恐らく準名主（小百姓層）級の間人（もうと）層であつただろうと考えられるのである。ただし澄川とする本地区内は、該当期には斎藤氏から分流したと考えられる澄川氏が居住していたことが確かであることから、同氏族が本百姓級としての名主制を確立していた可能性も残していると考えられるのである。

なお、地内の中塚には明治期まで存在したといわれる組神としての大元社跡があり、また匹見川河畔のハツ表の岩頭には小祠があったといわれ、鎌倉期の大水害によって流失したという伝承が残っている。そして、そこには対岸の山地から崩落した大岩も見られ、その時に7人の早乙女が落命したともいわれ、興味ある民俗譚も伝えられている。

(渡辺友千代)

〔註1〕 井上寛司・岡崎三郎編集『史料集益田兼見とその時代—益田家文書の語る中世の益田(1)』 1996年2月発行

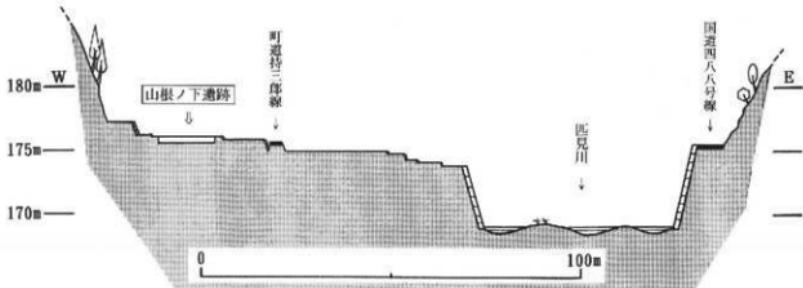
## 第3章 調査の概要

### 第1節 はじめに

本遺跡は、匹見町大字澄川イ80番地ほかに所在し、その山根ノ下（やまねのした）の字名をもつて遺跡と命名することにした（第1・2図・図版1）。

該当地は、澄川地区の南東側にあって、狭長な谷平地が部分的に存在するうちの最も上流域の、比高差約5mを測る左岸に立地する。狭長な河岸段丘が発達する本遺跡周辺は、水田が拡がり、その段丘を貫通する町道澄川支線沿いには民家が点在し、そして上流側に位置する現地の標高は約170~178mを測る。また、対岸の山裾には匹見川に沿って国道488号線が走り、下流に至っては益田市、上流に向かっては匹見中央部に通じている（第3図・図版2-1・2-2）。

平成11年度の12月上旬~1月中旬に行った分布調査では、段丘のやや高位に当たる山裾側寄りに形成された2筆の水田に、2m×2mの方形区を各1箇所設けて調査を行った。このうち下流寄りの北側の調査区（A区）から1点の打製石斧が出土したことによって、至近に本命と想定される遺跡があると判断されたのであった。したがって本格調査は、その地点から隣接するやや低位であった北西側（下流寄り）の水田域に新たなトレーニングを設け、その状況を把握することからはじめたのであった（図版2-3）。

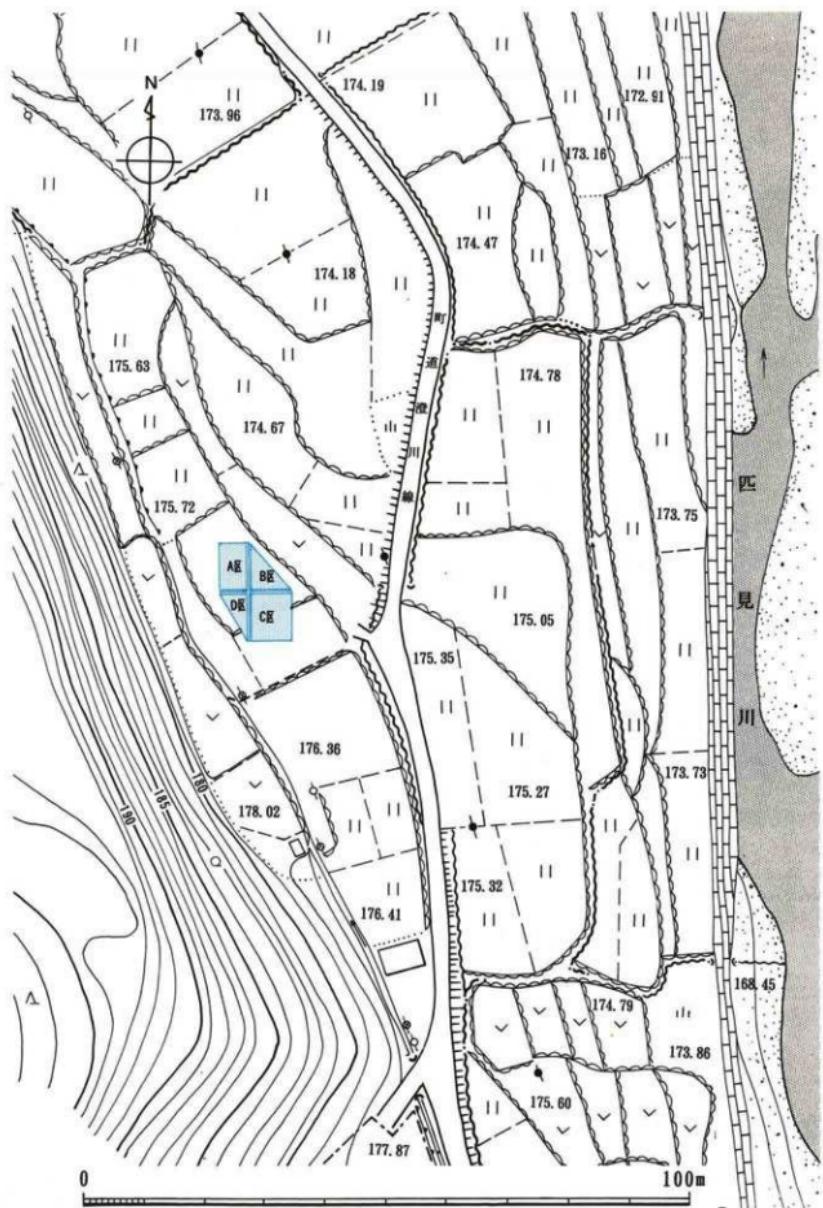


第3図 地形断面図

### 第2節 調査区の設定

調査区設定にあたっては、基本となる基準杭を定めることから始めたことにした。その基点は、分布調査でA区を設けた水田の北西側に隣接する表面標高176.12mを測る水田（約250m<sup>2</sup>）の南東寄りに任意に定めたのであった。

そしてその基点をもとに、南北方向に各8m測って北・南杭を定めて、西側に向かって幅1mのトレーニングをまず設けたのである。一方、東西方向には、基点から東方向に7m測って東杭を、そして西方向に5m測った地点に西杭を定め、南側に向かっては同幅のものを設けたのである。これら設定



第4図 調査区配置図



第5図 配置地区名図

面積152m<sup>2</sup>）には、南一北・東一西方向に幅30cmセクションベルトを設けて4分割とした。これら4区画したものは、アルファベットの大文字を用いて、北西側の山寄りの区をAとし、そして右回りの方向順にB・C・D区と呼称することにしたのであった（第5図）。

### 第3節 層序と層位

本遺跡における基本的層序は、灰褐色粘質土（耕作土）、2層橙褐色土（酸化鉄層）、3層灰～暗褐色土、4層黄灰色砂質土の順で堆積していた（第6・7図・図版2-4～2-8）。

各地区においても基本的には上述のように堆積しているが、調査区の北・南半部では基本層位とは異なる部分もみられたのである。とくに南半部のやや高位なC区南半域では3層灰～暗褐色土が層薄で、土質・色調的にみても3層下位部の暗褐色土系であるといった状況から、本地点周辺が水田造成等によって、上位部に深度の高い削平が成されたものと推察される（第7図・図版2-7）。一方、北半部では基盤層が北東方向に下がっていくにつれ、その3層は厚くなつて堆積しているのであった。以下、基本的層序にしたがい上位から下位へと、その状況をみていくことにする。

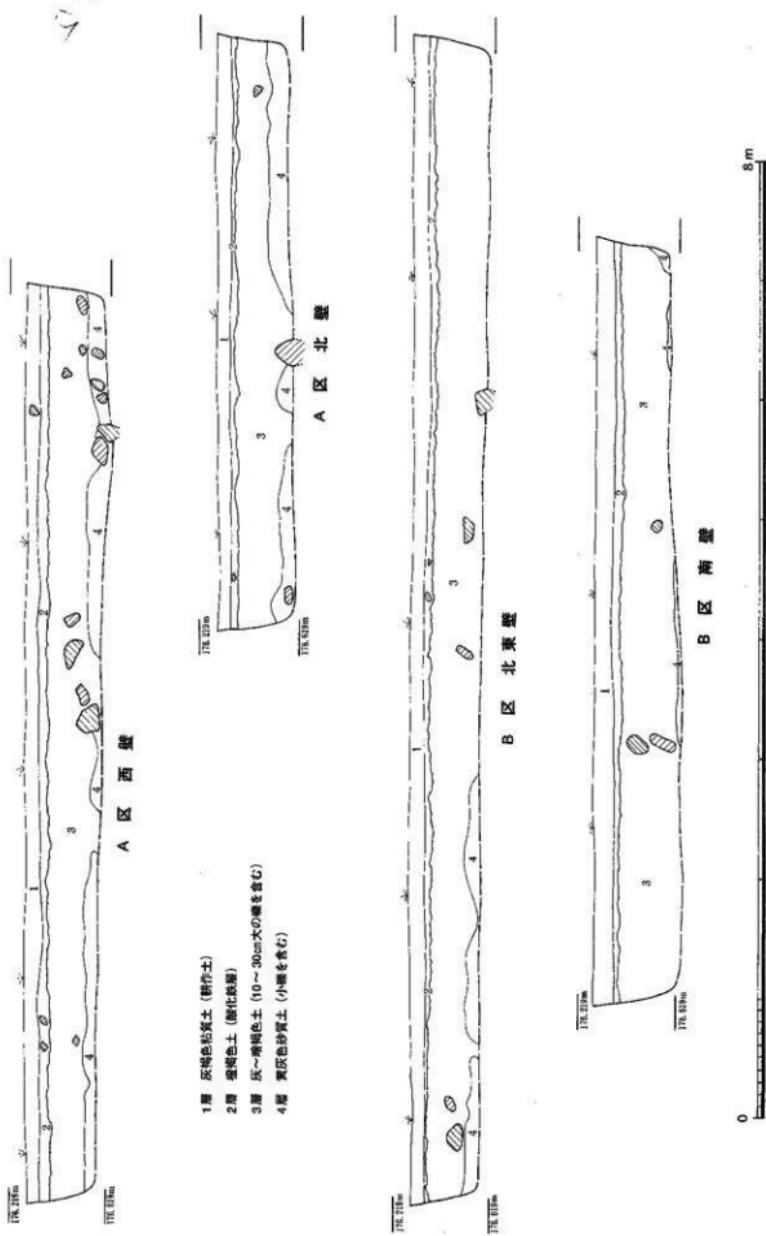
そのうちの1層の水田耕作土は、粘質性をもつた灰褐色土であった。その層厚は10～16cmを測り、総体的にみて、B区を設置した北東方向に向かって厚く堆積する。これは原地形を呈したと想定される斜度に関係したものと考えられる。つぎの2層は、酸化鉄が含浸した橙褐色土。下位層の灰～暗褐色土とは色調から分離しているが、実質的には下位層の3層と類似したものと捉えられる層状を呈していた。つまり3層灰～暗褐色土に、酸化鉄が上位部に含浸したものと想定されるのである。層厚は、

したトレンチは、凡そ区形が十字状を呈しているので、十字トレンチと呼称することにした。調査は、この十字トレンチから層序または遺物の分布状況などを把握するために、まず掘削を開始することにしたのである。その結果、3層上面から炭化物・焼土痕などが確認され、また土器などの遺物が多量に出土したため、そこで十字トレンチを拡張して調査区を設けることにした。

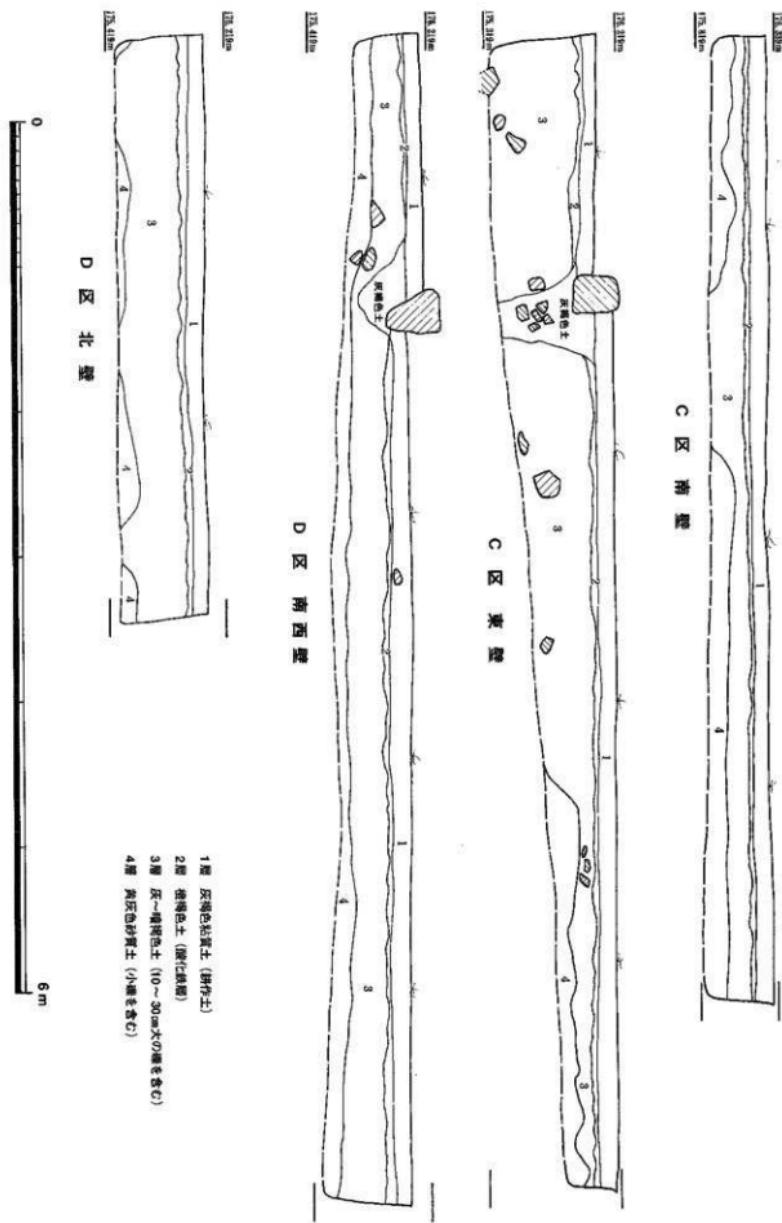
まず北辺側を拡張するため、北坑を起点に西側に向かって5m測って、北西杭を設け西杭と結んだ。また東側に向かっては、北東面を斜行する石垣築地に余地をこして、起点から東杭を結んだのである。一方、南辺側は、東杭から南側に向かって8m測って南東杭を設け、南杭に延ばし、そして南西面を仕切る石垣築地を考慮しながら、十字トレンチの南一西辺端部を直線で結ぶといった変則的な造り方をしたのである（第4図）。

そうした、やや亀甲文状を呈した調査区内（

新潟市西区北側地盤の堆積状況



第6図 土層堆積状況図(1)



第7図 土層堆積状況図(2)

3~8mを測って、厚薄差がみられた。なお本層までの層序には、とくにB・C区を中心とした東半部辺に土師器片などの中世遺物が出土し、また、おそらく搬入したと思われる2点の縄文遺物（打製石斧片）も混在していた（第2表）。

10~30cm大の角礫を含む灰~暗褐色土の3層は、基盤層が上昇する南側（上流側）が約6~16cmを測って薄く、その逆に、北側（下流側）に向かって層厚約60cmを測って厚く堆積していたのである（第6・7図）。これらの堆積状況から、とくに南半側のC調査区周辺において深度に至る削平が行われたものと考えられる。

したがって、本来は原地形に沿ってある程度の堆積高があったものと想像されるのである。なお本層の上~中位部にかけて多量の炭化物・焼土灰がみられ、また土師器などを中心とした約1300点余りの中世期のものが出土した（図版3-1~3-3）。そしてその下位部（C・D区域）からは土器片・石器類などの縄文期のものがまとまりの無い状態で数点ほど検出された（第2表・図版3-4）。そして遺構は、4層との境界にみられたが、混在するといった遺物出土状況からみて、2つの文化層が形成されていたものと捉えられる。しかし遺構については同一層内ということもあってか、同位部では把握することはできなかったのである。ただしC・D区の南半側で検出された遺構には、下位部の暗褐色系の上質のものが陥入していることや、共伴遺物などからみて縄文期のものと想像している。

河床疊と想定される6層は、黄灰色をした砂質土である。しかし砂質土といつても、北・南半部の端部に露出した上位部をみると、20cm大の円礫を含んでおり、実質的には河床疊層といえるものであり、本遺跡の基盤層にあたるものということができよう。

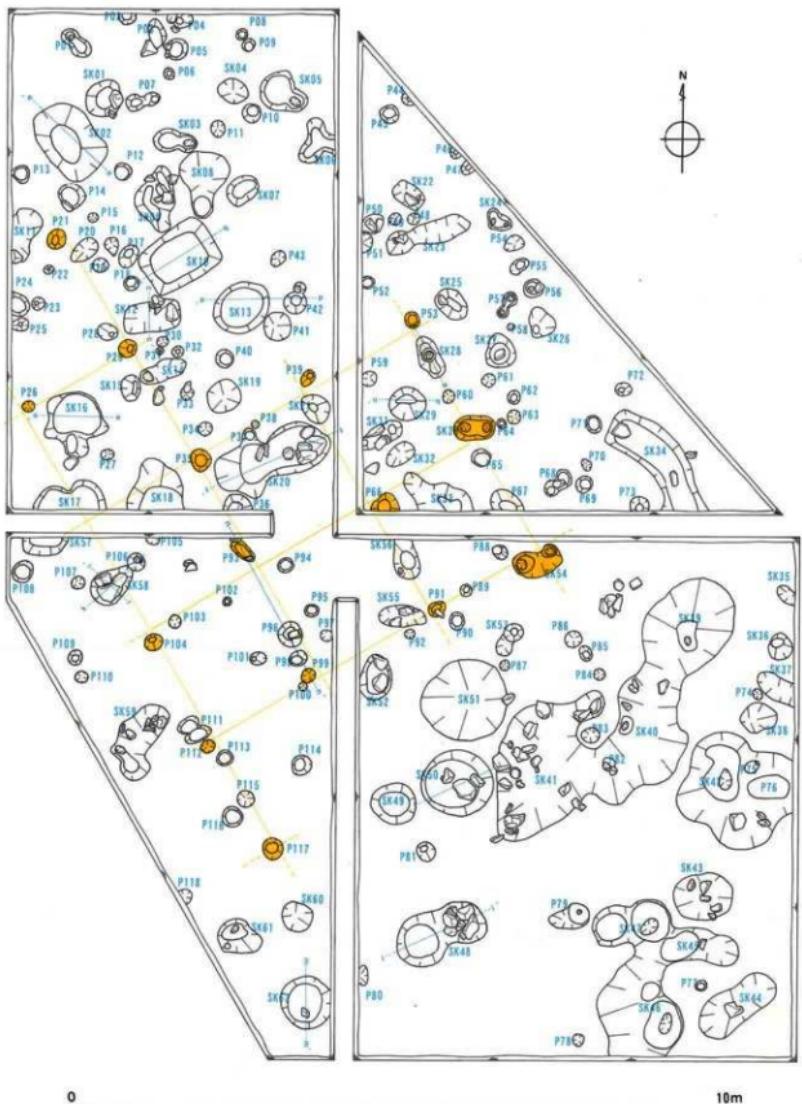
## 第4節 遺構

### 1.はじめに

本遺跡では、3層の灰~暗褐色土が遺物・遺構の包含・構築層であったということができる。これらのうち遺物においては、上~中位部に土師器などを中心とした千数百点余りの中世期のものが、そして下位部には少量の縄文土器・打製石斧などが出土している。また遺構においては、そのほとんどが上・中位の中世遺物に伴うと想定できるものであったが、しかし基盤層が上昇する南半の端部には、縄文期に伴うものと思われるものが、一部みられたのである。本項ではこの南期の遺構を中心として、以下記述することにする。

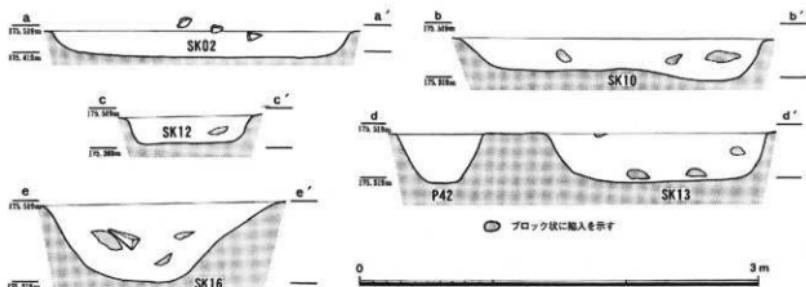
そのうちの中世期のものと想定される遺構は、3層灰~暗褐色土と4層黄灰色砂質土との境界で確認された。それらの遺構の大半には、文化層として捉えた3層のうちでも炭化物が多量に混在する灰色上系、そしてブロック状の4層が嵌入していることから、構築面は3層の上・中位に存在していた可能性が考えられる。また、縄文期のものも同層界で検出されたものであるが、それらには灰~暗褐色土の中でも濃厚な下位部の土質が陥入していた。また、それらに共伴する遺物などから考えると、明確に断定はできないが、その構築面は3層下位部にあったと理解している。

これら多半の遺構は、4層に陥入して検出されるため、その坑底部などは把握できたものの、構築上位部がはっきりしないのが現状であったのである。そして遺構をみるとかぎり、そこには時期幅が捉られるが、遺構との遺物共伴性が把握できないものもある。これは同一層内であったことにも影響し



第8図 遺構指示図





第9図 遺構陥入状況図(1)

ているものと考えられる。

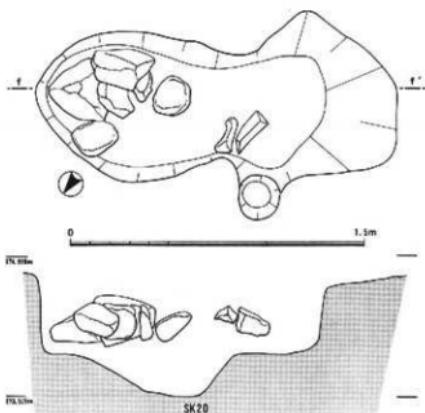
なお遺構については、その形状から柱穴状のものをP、土坑状のものをSKと略号することにしていく(第8・14図)。

## 2. 検出遺構

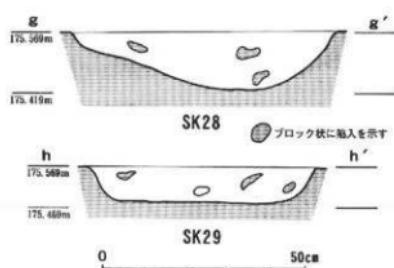
ピット(P)と略称するものは、188穴検出された(第8図・第1表・図版4-7)。その大半は径20~30cmを測るもので、主にA・B~C・D区の北半面に多く確認された(図版6-5)。これらは3層と4層との層界に検出されたもので、いずれも中世期の文化層として捉えた3層中位以上の灰色土系の土質が坑内に陷入していた。また共伴した土師器・陶磁器片などから考えて、その柱穴群はほぼ同時期のものと想定されるが、削平度の高い上位層の出土であったために、中にはすでに削平されて消去されているものもあるかと考えられる。

その柱穴群のほとんどが掘立式のものであって、中にはP68・P93・P96にみられるように(第13図・図版5-6・6-1)柱を支えた、と思われる補強石といえるものを伴うものもみられたのである。そしてこれらの柱穴から掘立柱建物を浮き彫りにしてみようと試みたが、數次における立て替えが行われたことが考えられ、また180基余りという柱穴数から様々に捉えられ、限定することは容易ではない。しかし間隔的に捉えられると、そこにははある程度の規準的なもの、そして方向性が看取できないでもないと思われる。

例えれば、北西側を北西-南東方向にP21・P29・P35・P93・P99の配列した柱穴間隔を測ると、1間(6尺6寸)の約2mを平均値とした4間であった。この間隔・配列を基準として捉られると、そこには同一方向で対応する3つの配列がみられたの

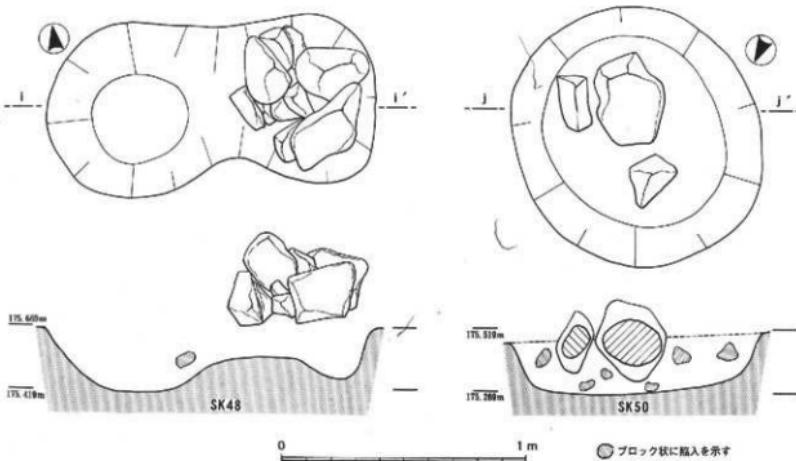


第10図 遺構陥入状況図(2)



第11図 遺構陥入状況図(3)

みると、その南東側からSK54・P91・P99・P112配列及び、SK30・P66・P93・P104などの列が並列し、また、その次ぎに配列するP53・P39・P35なども順列して相対することになる。このように同方向においても、3間(6m)までの柱間隔をもつ配列が捉えられるのである。したがって、それら配列・方向性から考えて、北西-南東方向には最長4~5間の柱間隔をもつ柱穴が配列され、またそれは北東-南西方向に2~3間の間隔で形成されていたのではないかと想像されるのである。つまり32~60m程度の面積をもつ、掘立式の建物が存在したのではないかと推察されるのであった。一方、C・D区の南半面で検出されたP77・P78・P79···などの柱穴には、3層下位部の暗褐色系のものが陥入し、そこには共伴する遺物などはみられない。しかしそれらを層序状況・遺物出土状況からみると、縄文遺構として判断できるものの、その柱穴に数基がからむということもあって、その機能的性格に

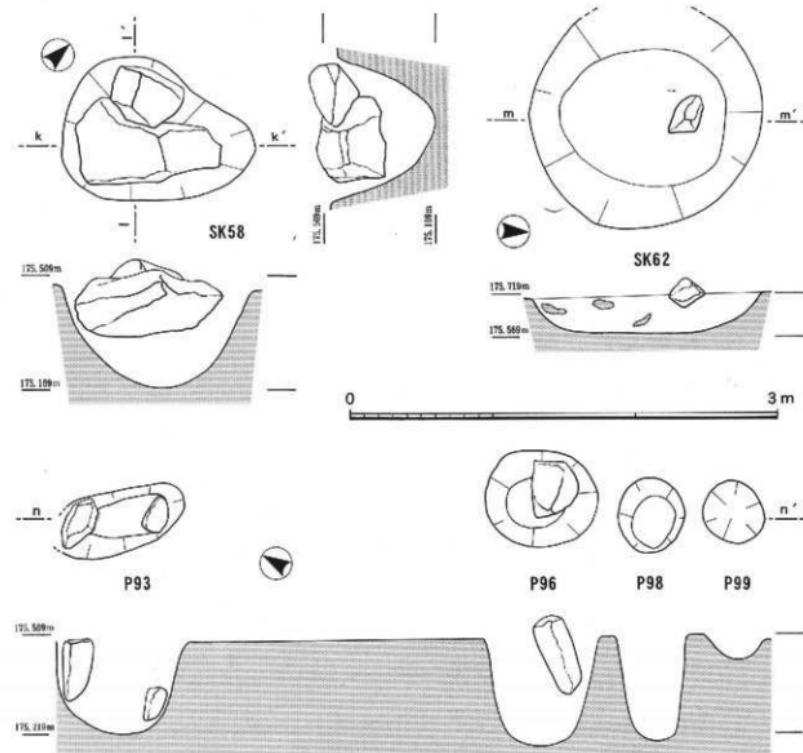


第12図 遺構陥入状況図(4)

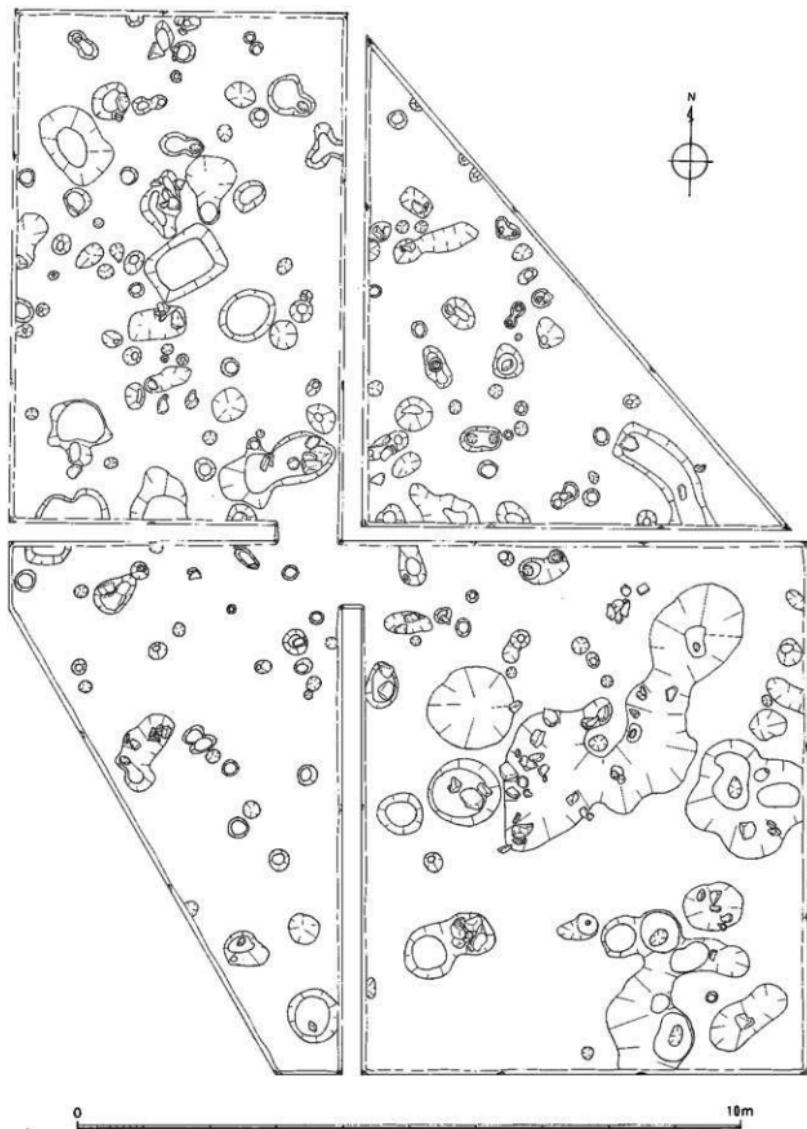
については捉えることができなかつたのである。

SK(土坑)と略号するものは、62坑が検出された(第8図・第1表・図版3-5・4-2・4-3)。いずれもこれらはピットと同様、3層と4層の層界面に検出され、3層の灰~暗褐色土が陥入していた。このうちA区の北西端面に確認されたSK02では、橙褐色の焼土が出土しており、また炭化物も顕著であった(第9図・図版3-6)。このような状況から、炉であった可能性が強いが、削平などがある、原形のものであるかは明確にはできなかつた。なお本坑からは上師器・鉄滓の各5点が検出された。

そしてその南東面に確認されたSK10・SK12・SK13・SK16は、最大径80~100cm前後、深さ15~30cm測り、長方形・ほぼ円形を呈すものである(第9図・図版3-5・3-7・3-8)。その坑内には3層上位部の灰色土系ものが陥入し、部分的に4層の黄灰褐色砂質土が嵌入していたのである(図版5-1~5-3)。またSK12を除く土坑からは、中世期の遺物が共伴していることから、同時期のものと想定できるが、その機能的用途は明らかできなかつた(図版6-4)。



第13図 遺構陥入状況図(5)



第14図 遺構図

そして同区内の南東隅に検出されたSK20（図版4-1）は、最大長径が184cm、短径52cmを測って、深さ62cmで不整形を呈した土坑である。その坑壁は斜度もち、坑内には3層上位部の土質が陥入し、炭化物が多量にみられた。また、坑中には径20~30cmを測る河原石が8石確認され、それらの大半は焼石で、主に北東側に集中してみられたのである（第10図・図版5-4）。こうした意図的と思われる集石遺構は、C区のSK50（第12図・図版4-6）、D区のSK58（第13図・図版4-8）上坑にも比較的大きい石が配置され、また中には意識的に削られたものが使用されていることから、形態的にみて、礎石的であったと想定した（図版5-8・6-2）。

なお、その内のSK20・SK50上坑からは、土師器・瓦器・土錘など合計100点余りものが共伴し、また搬入されたと思われる1点の黒耀石（白）が出土している。

またB区の西壁寄りに検出されたSK28・SK29は、凡そ径50cm前後で、深さ13~29cmを測って浅く、比較的小さなものであった（第11図・図版5-5）。これらも3層から4層に至る陥入状況から中世期の遺構と考えられるが、しかし共伴する遺物などがみられなく、判然としないものであったのである。

そして南側のC区に検出された遺構の中には、遺物から繩文・中世期のものが重複する土坑ではないかと思われた。それは南西端に検出されたSK48（図版4-5）で、短径70cm、長径138cmを測り、瓢箪状を呈して深さ30cmと比較的深く、坑壁は緩斜であった。坑内には3層の灰~暗褐色系が陥入しているのが本遺跡の基準であるが、それが土質・色調的にみても、上~中・下位部のどちらのものは見極はめできなかったのである。そして坑上には、意識的と想定される径20~40cm大ほどの河原石が10石件ない。また、それが坑の北東側に重なるように配石していたのである。一方、坑底部は2つの皿状の陥ち込みになっていて、そこには切り合いがみとめられたのであった（第12図・図版5-7）。そしてそれを共伴遺物の関係からみると、坑の南西半部から5点の土師器が確認され、また1点の打製石斧がほぼ中央部に、北東半部寄りに繩文土器の1点が出土している。これらのことから新旧関係はある程度判断できたものの、しかし精査できなかったので上位部に構築された配石が、どのような性格のものは判らなかったのである。また、それに関連すると思われる遺構がその西面に、そしてD区の南端面に確認された。それはSK42・SK45・SK62などの土坑で、3層下位部の暗褐色系の土質ものが陥入し、繩文遺物を伴っていたのである（第13図・図版4-4・6-3）。これらの遺物の包含・共伴性から、それらは同時期の一連性をもったものと想定される。しかし拡張していないので全体像は把握できなかったのが現状であった。

（栗田 美文）

## 第4章 出土遺物

### 第1節 はじめに

採り上げについては、基本的に原位置法式を用いて行った。ただし、耕作上の1層および酸化鉄が含浸した2層においては、層位を記して採集のみにとどめたものもあり、またこれ以外に廃土、あるいは隣近で採集したというものは数点含み、すべて原位置法式で実施したものではない。

また、本遺跡からは遺物集計表に示したとおり、1726点のものが出土・採集されているが、炭化物や焼上においては数量は示していないし、金属滓（鉄滓）は岡掲しなかった。

### 第2節 出土・採集遺物のようす

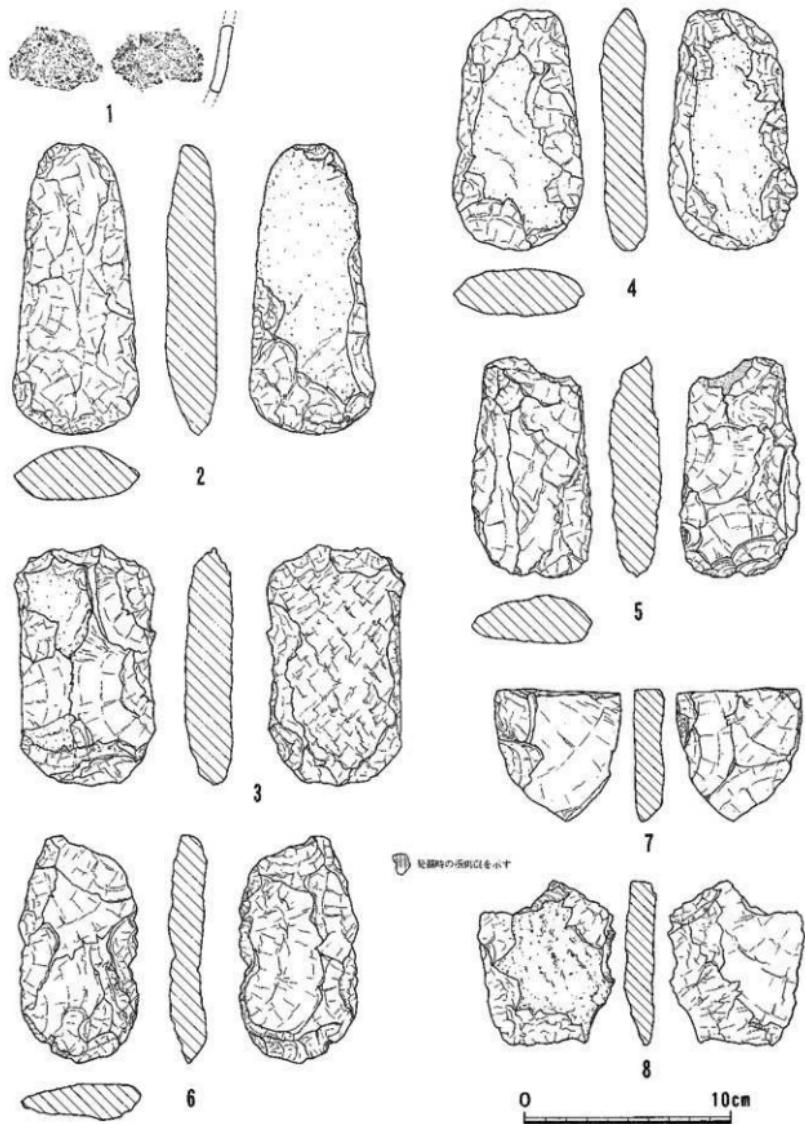
本遺跡で最も多く出土したのが土師質土器の1403点、そして金属滓の86点、陶磁器類の82点、瓦器質土器の50点、土錘の38点、金属器類の30点とつづき、その大半は中世遺物で占められる（約98%）。

他では縄文土器などの数点に比べて、14点の打製石斧の出土数は目をひくとともに、縄文時代も介在していることがわかった。ただし全体の1.4パーセントであり、これらの縄文遺物は南東側の極めて限られた辺部を中心に出土したものであった。しかも高い深度による削平が行われていて、その様態は確かにできなかったのである。

さて、問題は98パーセントに及ぶ中世遺物で、このうち土師質・瓦器質土器が1453点と、全体の約

第2表 遺物集計表

	打製石	石錘	石斧	磨製石	鐵石	鐵錘	鐵工具	生土器	土錘	土器	瓦器	燒土	瓦器質土器	土師質土器	金屬物	金屬滓	石	白	青	77	
A 1 - 2層									1											17	
区 3	解	1							29	4	3	5	11		1	13	27		少量	324	
B 1 - 2層	11								29		1	7								36	
H 3 層	1		1						152	7	3		2		1	7		少量	130		
3層下掘									44		2					1	1			45	
C 1 - 2層									35		2	5				1		多量	46		
区 3 层	1		1						279	6	14	4	1			9	13			231	
D 1 - 2層	1								1											31	
区 3 层									37	4	1	2				2		少量	66		
3層下掘									86	0	6	2	1		1	5		少量	104		
東庭1-2階									5		7									12	
+ W 79.3層									79	6	2					1	6			47	
西庭21.2層									1		3	1								5	
ト 西庭23.3層									50	4						1	4			19	
ソ 直庭1.2層												6								6	
ソ 直庭2.3層									42	1	3					1	1			48	
ナ 東庭1.2層												8								6	
北庭3層									50	4	1	1				1	4			70	
A Cベルト									3							3				5	
B Cベルト									117	11	1					3				36	
C Dベルト									18			4					2			24	
A Dベルト									12	1	1	1				1				14	
其他遺物	6			1	5				164	10	3	5	1			11	1	1		20%	
焼土・石器									2	1		1				1	2			7	
計	14	1	1	1	1				1403	90	38	1	25	4	1	3	31	86	1	1	1726



第15図 縄文遺物実測図

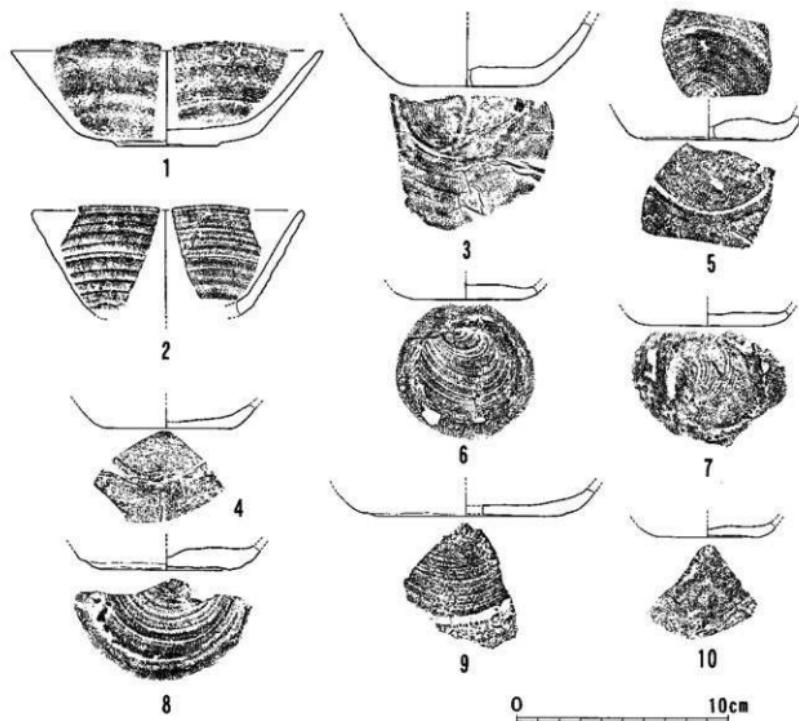
84パーセントを占める。これらは器形・文様あるいは調整などから捉えようとしても、その事例が極めて限られていること、また端的な時期差が捉えることが困難であることなどから、判断が下しにくいのが実状である。しかしながら、共伴した陶磁器類からみると、その多くは15世紀に位置付けられるものであるから、それら土師質・瓦器質土器は該当時期の範疇で捉えることができるものといつてよいだろう。

そして、注意されるのは86点の鉄滓、1点の羽口と思われるものの出土である。これらは中世造構との共伴性からみて、該期のものであることがわかったとともに、本住居者が鉄の精錬技術を習得していたということであろう。ただし今回、化学分析を行っていないので、詳細については明確にはいえない。

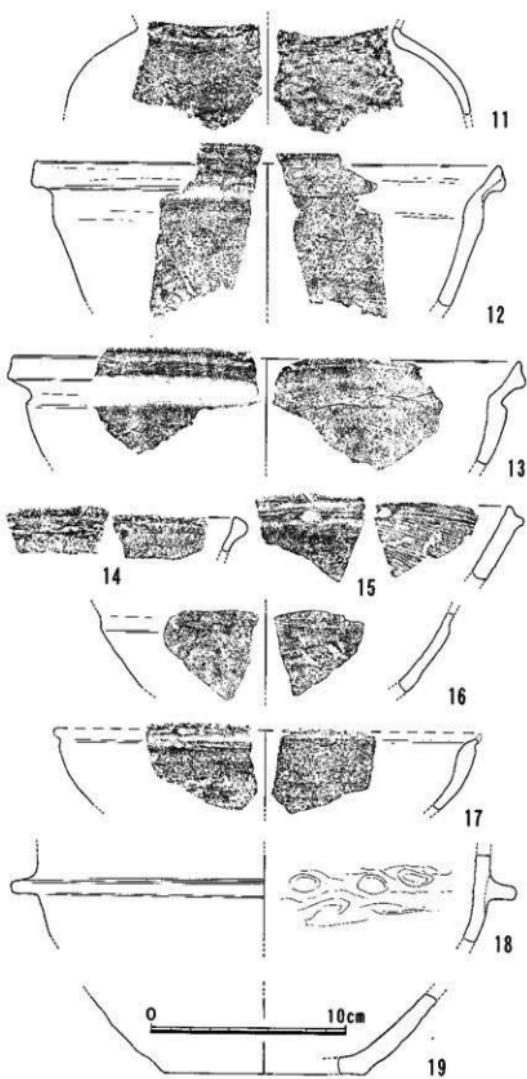
### 第3節 実測遺物

#### 1. 繩文遺物

縄文土器（第15図・図版7-1）本調査では5点の縄文土器、そして1点の弥生土器と思われるも



第16図 土師質実測図



第17図 瓦質実測図

のが出土したが、いずれも小・細片で、このうち1と図示したもののが最も大片といえる縄文土器であった。

その1は、粗製系の胴部片で、外面にはケズリ（条痕かも知れない）、内面はナデをもって調整したもの。色調は暗褐色を呈し、外面には煤が付着して黒褐色。調整の仕方に問題があるものの、後期に比定できるものではないだろうか。

石器(第15図・図版8-1)  
2~8は、いずれも玄武岩質の打製石斧で、このうち7・8は損壊したものの。うち2は、器長13.6cm、最大幅約6cm、最大厚2.6cmを測る。腹面とした裏面に自然面がみられるものの、丁寧な剥離で形成した秀品といえる打製石斧。器形または厚みを有することからみて、磨製石斧の未完成品であろう。5は短圓形、3~5は橢形といえるもの。

## 2. 中世遺物

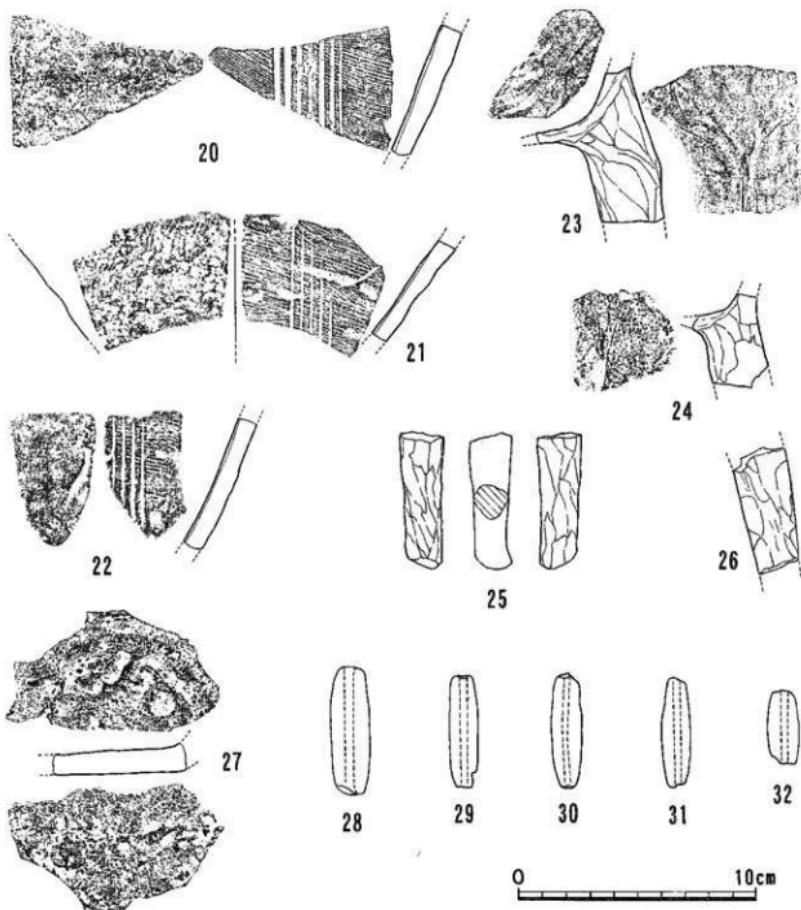
土師質土器(第16図・図版7-3)  
1~10は、いずれも朱味および上師質系のもので、口縁部を欠くものの底部が薄く、またその径が小さいことから、いずれも盤・皿類のものであろう。

うち1は、上半の体部が直線的で薄く、底部には僅かな高台部をもつもの。内外面には施文具による調整痕が僅かみられ、

凹凸する。仕上げは、外面は回転ナデ、内面は不整形のナデで、外面には煤が付着する。2は、前者と同様な体部形のもので、とくに外面の調整痕は顕著で、凹凸している。4の底部は薄く、接置面の切り放しは回転糸切り。

以下、5～10はいずれも切り放しは回転糸切りで、その接置部は1を除き、ベタ底といえるもの。また底部内面の中志部にはU字状の凹みがみられ、とくに8は顕著である。

瓦器質土器（第17・18図・図版7-3・-4）11は、口縁部を欠くが、器形からみて瓦器質の壺と思われる。内外面ともナデで、器面は粗く、精緻なものとはいえない。色調は橙～褐色を呈し、提

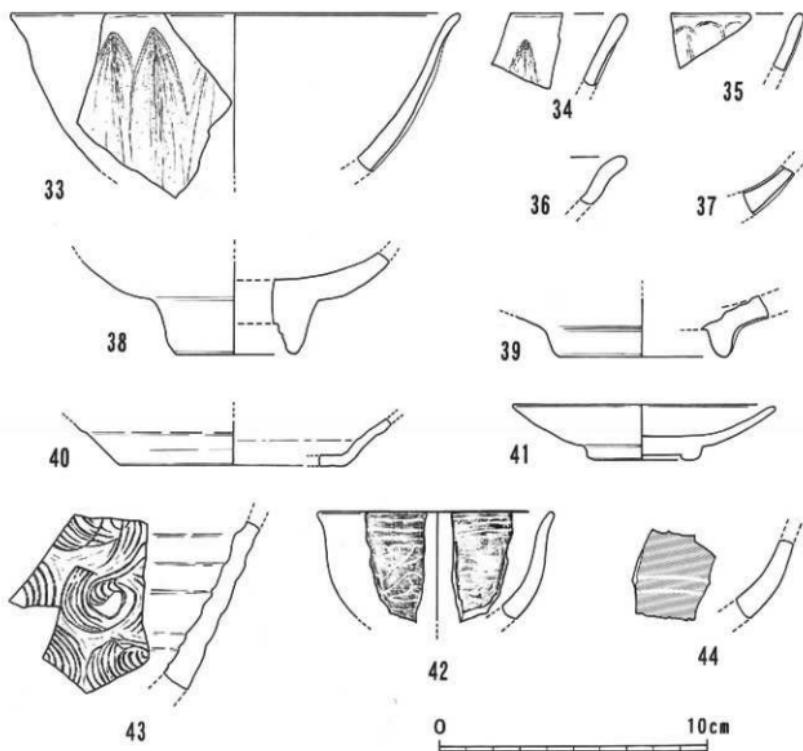


第18図 瓦質・須恵器・土鐘実測図

え方によっては土師質ともいえるもの。12は、足鍋の上半部。頸部は短く外傾して「く」の字形を呈し、口縁部はその逆を成して肥厚させている。内外面とも精緻なヨコナデで、胎土の色調は白灰色、外面は暗褐色である。13も、12と同形態のものであるが、頸部の傾き具合が12に比べて明瞭である。調整は精緻なナデで、胎土の色調は白灰色であるが、器面は黒褐色。14も、足鍋のものであろう。

15は、擂鉢の口縁部で、体部は直線的。口端部外面に僅かな凹線がみられ、その器肉が張出したままで口縁形をつくる。内面は斜向のハケメ、外面はナデで仕上げる。形態的にみて、南北朝から室町初期のものと思われる。16・17とも、口唇部を欠く鍋系のもの。18は、羽釜で、外面側に鍔を有し、その鍔は上下に片寄らず、均等に張り出し、その端部は円みおびる。成形は丁寧とはいえず、指頭痕などがみられ、仕上げはナデである。色調は、橙褐～灰褐色である。

19は、壺・甕系の下半部と思われるもの。外面には成形の指頭痕などがみられ、凹凸するが、内面は横方向の丁寧なハケメ調整。20は、擂鉢の胴部片。外面は調整痕がのこって波うつが、内面には



第19図 陶磁器実測図

横・斜め方向の精緻なハケメ、そして縦方向からは7条の御目が付けられる。色調は白灰色を呈し、焼成は精良品といえるもの。21・22も、擂鉢の胸部片で、両者とも外面の器壁は凹凸し、とくに前者は斜めのハケメ調整が顕著。内面は横方向のハケメとして、数条単位による御目を施している。色調は外面は灰色、内面は黒褐色を呈する。23~26は、足鍋の足部で、いずれも調整痕がのこり器面は凹凸する。色調は23が褐色、24~26は灰白色である。

須恵質土器（第18図・図版7-4）27は、須恵質土器で、底部と思われるもの。内外面とも器面はザラザラし、仕上げは不整方向のナデである。色調は外面が茶褐色、内面は灰白色で、焼成は堅絞といえるもの。

土錘（第18図・図版7-5）28~32は、土錘。このうち28は、長さ約5.5cm、最大径約1.8cmを測ってやや大きめ。29・30・31は、細めで、器面は平滑、色調は明朱色、28・32は褐色である。

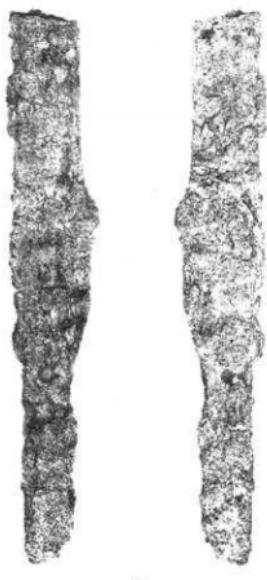
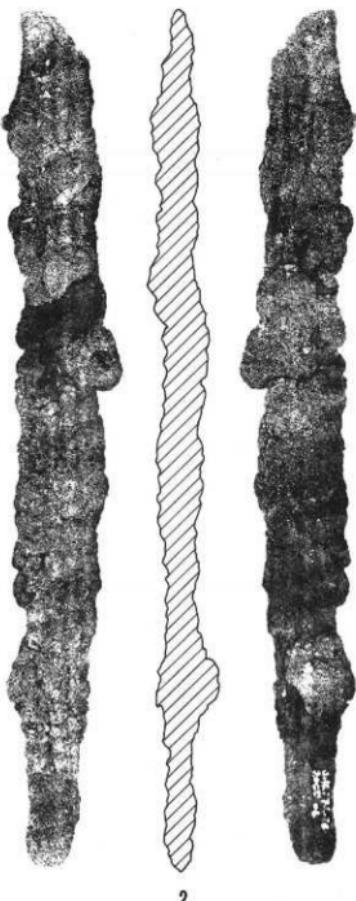
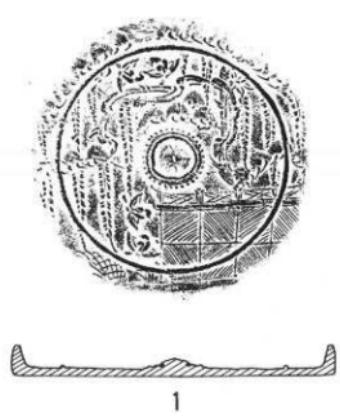
陶磁器（第19図・図版7-5）33~44は陶磁器類。このうち33は、口径約16cmを測る碗形の青磁で、外面に錦蓮弁文を有するもの。釉は厚く、緑灰色を呈する。おそらく12~13世紀ごろの龍泉窯の所産のものであろう。34も、前者と同形態のものであるが、ただ色調が黄緑色で、その釉層に水裂状の貫入がみられる。35も、外面に錦蓮弁文を有したもので、その蓮弁端は円く、そして細い。色調は、かすんだ黄緑色を呈し、蓮弁形態からみて、おそらく15世紀ごろのものと想定できるものであろう。36・37も青磁。前者は口縁部に僅かな反りがあり、釉層には貫入がみられる。38・39は、青磁の底部で、前者は高台が高く、色調は薄緑、後者は灰緑色。40・41は、白磁の皿。このうち前者は器壁は薄く、色調は白~白緑色で、腰部はキリッとしたもの。おそらく景德鎮系の14世紀のものであろう。また後者は反りのある体形のもので、器壁も厚く、中国産系の15世紀のものと思われるもの。

42・44は、外面に青磁象嵌といわれる模様を有したものの、うち前者は口径約9cm余りを測る小碗。後者は、その碗形の下半部で、内面にも白灰色の象嵌模様がみられる。おそらく14~15世紀ごろの中国、あるいは朝鮮などで所産された輸入品であろう。43は、青白磁の壺形の梅瓶といわれるものである。内面には横方向の調整痕が段状に付けられ、外面には数条単位の筋書き状による渦巻が彫状に描かれる。色調は、外面は淡青色、内面は淡茶色を呈して塗釉されている。本片は他にも2・3片みられる。13世紀ごろのものと思われ、おそらく伝世品であろう。

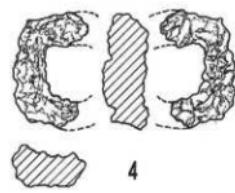
金属器（第20図・図版8-2）1は、腹面を上側にして表出した和鏡（図版7-2）。径11.5cm、外縁厚は約1cmを測る円鏡のもの。鏡腹の中志部に円みの鋲をもち、2方からは示し程度の鋲孔が施されている。そして、鋲座の径は約2.4cm、鋲までの高さ約0.6cm、また中志から1/3程度には半円形の界隈がみられ、その内・外区には一連の絵画文様が施されている。

その鏡腹文は、柳・松の植樹、雀の鳥類、そして桧垣が配された庭園風景といえるもの。和鏡研究者である飛鳥資料館の杉山洋研究官によると「一部には絵画的で鎌倉的な様相であるが、外縁が厚くないことから、12世紀代、それも後半に位置付けられるものではないか」といわれ、氏は「桧垣松柳飛鳥鏡」と銘々した。なお、鏡腹には毛筆による文言が一部みられるが、損消して殆ど判読できない。ただ縦書きされた文頭に「敬白」、そして文尾に年号を示したと思われる「永徳・・・」のみが読みとられる。

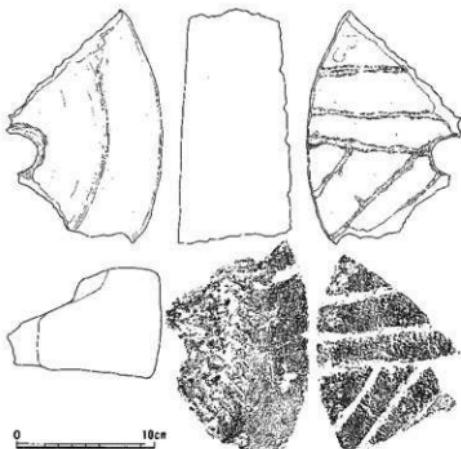
2・3は、鐵劍で、本遺跡では3点のものが出土、採集されていれる。そのうち2は、長さ約31cm



鉄針はコピーによる複写



第20図 和鏡・鐵針・口金実測図



第21図 石臼実測図

を測る直刀系の短刀で、最大幅2.3cm、茎部分は約10cmを測り、目釘穴を有する(図版8-3)。3は、本遺跡の近隣で採集されたもので、剣先部分を損失したもの。4は、刃物類の口金。

石臼(第21図・図版8-1) 図示している石臼は、安山系のものであるが、非常に軟質で、津和野の青野山のものと思われ、当地では玄表石と呼称されているものである。

その石臼は、上側に当る上臼といわれるもので、口の方向から左まわしの正常臼である。口の間隔は2~2.5cmと粗く、また目筋の彫りも厚浅差や不等幅があって粗い。  
(渡辺友千代)

## 第5章 小括

本遺跡は、とくに出土遺物からみると、縄文文化期・中世文化期、そして現代を含む近世以降の文化期が介在していたということができる。

ただし、縄文期のものは、全体の比率からみても、1.4パーセント余りであり、遺構検出でも明確に捉えられるものは1基に過ぎず、また該地点は深度の高い削平などが認められるなど、そこには具体的な性格は明らかにできなかったのである。そして近世以降のものは、遺構は皆無で勿論のこと、遺物は数点と極めて断片的であって、当文化期が介在したことは確かであったとしても、それらを資料として採るに足りるものではなかったのであった。

さて、そこで全体出土数の98パーセントを占める中世文化期のものであるが、さらにこれらの出土した中世遺物の1702点を100パーセントとした数値でみると、土師質・瓦器質土器は1453点で、85.3パーセントを占めて最も多かったのである。これら上師皿、とくに櫛鉢・足鍋などにおける調整及び形態からみて、防長地域でいう皿に併行するものということができ〔註1〕、それは年代的にも後述の陶磁器とも合致するのである。その4.7パーセントの陶磁器類は、12世紀から16世紀のものもみられ、それをさらに凡そその比率でみると、15世紀のものが7割、14世紀は1.5割、13世紀は1割、そして12世紀・16世紀及び近世以降のその他のものが0.5割であった。

これらのことから希少の12世紀のものと判断するものは、他に諸種品がみられないことから仮想されたものと捉えられ、また16世紀のものなどは極めて断片的であることなどから、本外のものと判断して差支えなく、したがって本遺跡は、14世紀後半から15世紀前半を中心にして盛行していたものと想定できる。加えていうならば、その発生期は供奉されたとみられる和鏡に記された永徳年間（1381～84）ごろではなかったかとみている。

さて、遺構であるが、土坑としたものが62基、柱穴状のものが118穴検出され、これらのほとんどは形態的、共伴性からみて中世期の掘立柱家屋、それらに伴う諸機能をもった遺構であったと想定される。しかし具体的構造物は判断できず、ただ柱間隔からみると、それは6尺6寸（約2m）であったことが判断できたとともに、その柱列は北西—南東、北東—南西方向が窓われ、そこには該当期における鬼門などの災厄防御儀礼が働いた造りではないかと思われたのであった。

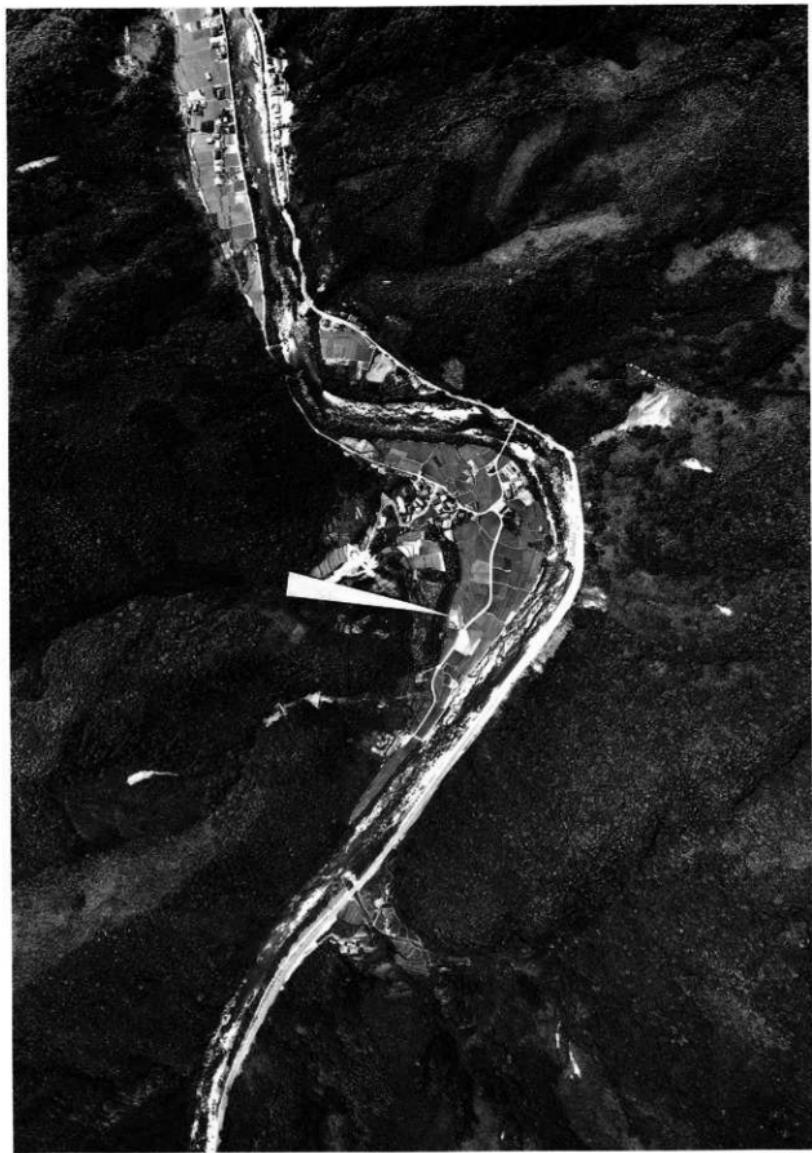
いずれにせよ、青磁・白磁などの秀品の外來陶磁器や鐵劍を携持し、また精錬技術をも習得していた可能性もある当住居者は唯者ではなく、おそらく本地區等における支配者クラスであったとみても間違いないと考える。本地區は、奥十二畠として国人の益川氏の勢力下に組込まれていた時期であったことを考えると、その傘下においての地侍（在地の有力農民）クラスの住居址であったのではないかと判断する。

（渡辺友千代）

〔註1〕岩崎仁志「山口考古第17号」「防長地域の足鍋について」山口考古学会 1988年

岩崎仁志「山口考古第19号」「防長型櫛鉢について」山口考古学会 1990年





鳥瞰する遺跡と周辺部

図版2



1. 北側からみた遺跡の全景



2. 匹見川から捉えた遺跡の全景（南東から）



3. 北側からみた十字トレンチの発掘風景



4. A調査区の西壁（南東から）



5. A調査区の状況と北壁（南西から）



6. B調査区の北東壁（南から）



7. C調査区の東壁（北西から）



8. D調査区の南西・西壁（南東から）



1. 土師器の出土状況



2. 足鍋の出土状況



3. 陶磁器の出土状況



4. 打製石斧の出土状況



5. A調査区の遺構表出状況（北から）



6. 焼土の頗著なSK02の表出状況（北から）

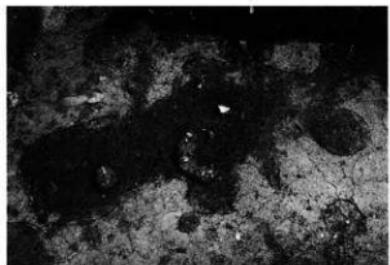


7. SK12の表出状況（北から）



8. SK13の表出状況（南から）

図版4



1. SK20の表出状況（北から）



2. B調査区の遺構表出状況（南から）



3. C調査区の遺構表出状況（北西から）



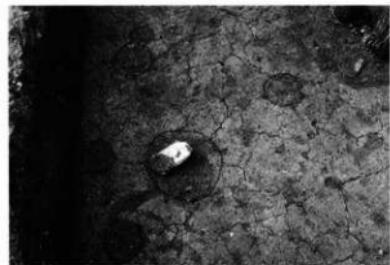
4. SK44・SK45の表出状況（北から）



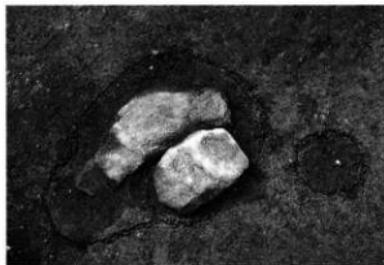
5. SK48の表出状況（北東から）



6. SK50の表出状況（西から）



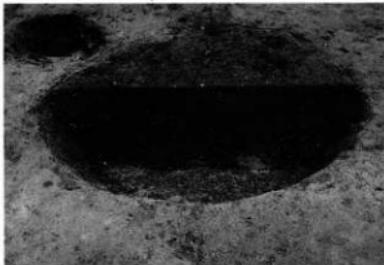
7. D調査区の遺構表出状況（北から）



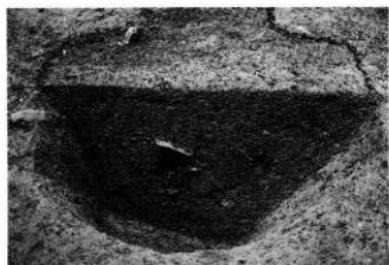
8. SK58の表出状況（北から）



1. SK10の半截状況（北西から）



2. SK13の半截状況（北から）



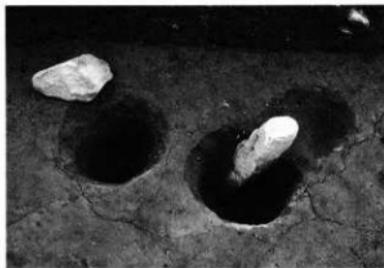
3. SK16の半截状況（北から）



4. SK20に検出された焼石（北から）



5. SK28・SK29の半截状況（北から）



6. P68・P69の検出状況（北から）

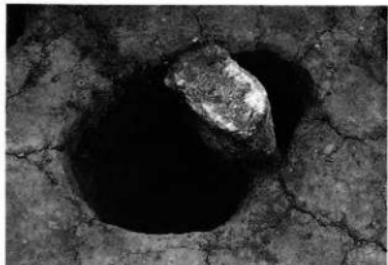


7. SK48の半截状況（南東から）



8. SK50の半截状況（北西から）

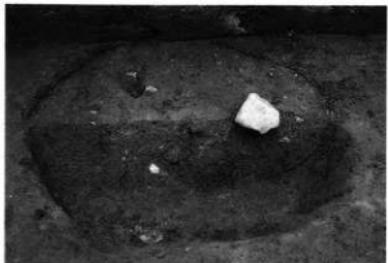
図版 6



1 . P96の検出状況（西から）



2 . SK58の半截状況（南東から）



3 . SK62の半截状況（西から）



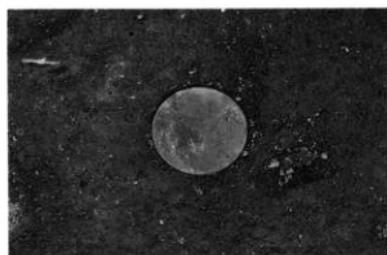
4 . A調査区の遺構完掘状況（南から）



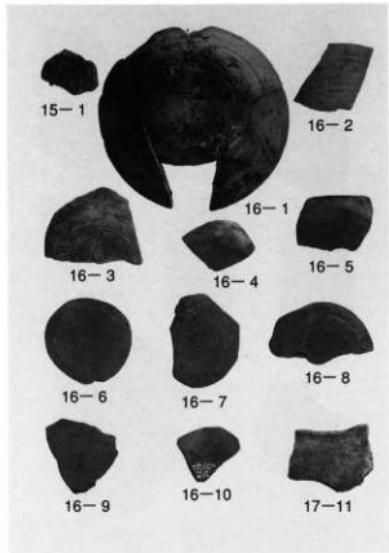
5 . 北からみたA・B・C・D調査区の遺構完掘状況



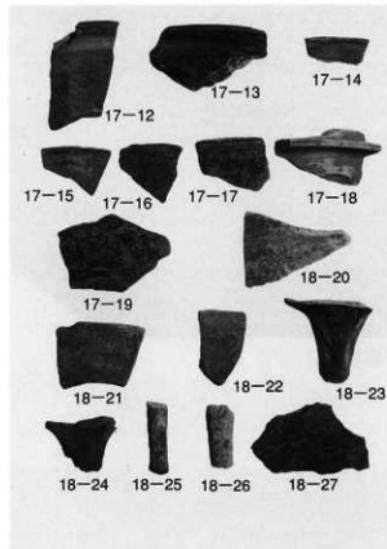
1. 鉄剣の出土状況



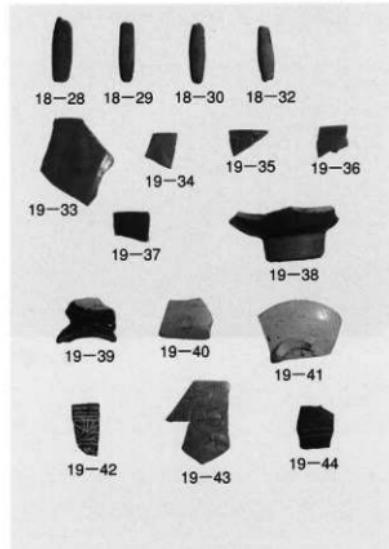
2. 和鏡の出土状況



3. 繩文土器・土師質類

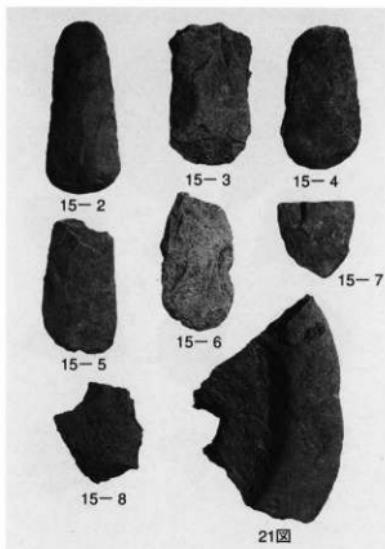


4. 土師・瓦質・須恵質器類



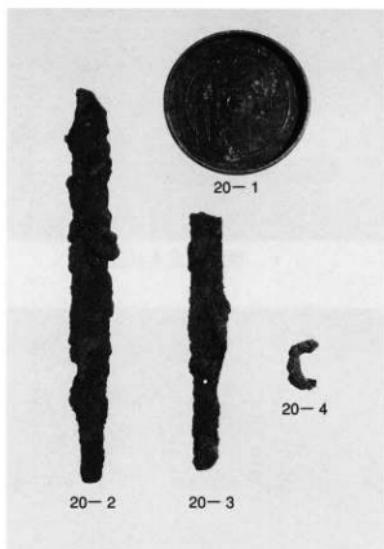
5. 土錘・陶磁器類

図版 8

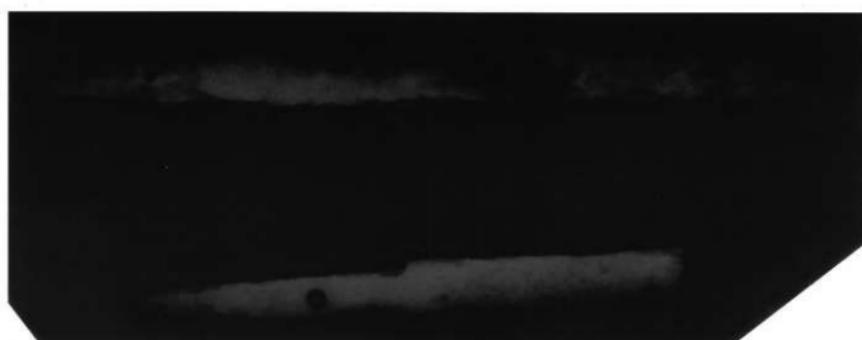


21図

1. 石 器 類



2. 金 屬 器 類



3. 鉄剣のX線写真

---

平成13年3月23日 印刷  
平成13年3月30日 発行

匹見町埋蔵文化財調査報告書第34集

**山根ノ下遺跡**

発行 匹見町教育委員会  
島根県美濃郡匹見町大字匹見才1260

印刷 株式会社 谷口印刷  
島根県松江市東長江町902-59

---